

第4章 未来をつくる(実現の方策)



木を植える

具体的に取り組んでいくこと

本計画の未来のすがたである「野の鳥の歌が聞こえるまち」を実現するために、3つの目標に沿った基本的な取り組みで土台づくりを行うとともに、地域別の拠点の保全やゾーニングによる育成、エコロジカルネットワーク形成や一人ひとりの取り組みなど、それぞれを連携させて施策を進めていきます。

4-1 土台づくり(基本の取り組み)

未来のすがたである「野の鳥の歌が聞こえるまち」を実現するためには、区民一人ひとりの活動はもちろんのこと、家庭や団体、学校などさまざまな主体の参画が必要です。目標ごとの基本行動に沿って、日ごろの生活の中から身近な自然に目を向け、樹木等の保全、民有地の緑化や区内に点在する公園等を拠点とした活動、生物多様性に配慮した暮らしや事業活動を展開します。

基本行動は、私たち(住民、事業者、団体など区内で生活し、活動するさまざまな主体)が行うものとしています。各主体と基本行動の関わりを下に示します。

表 4-1 各主体と基本行動に対する役割の関係

主 体		基本行動に対する役割の例				
		参 加 と 実 践	場・機会 の 提 供	活 動 の 支 援	情 報 の 提 供	協 働 し く み づ く り
区	目黒区	◎	◎	◎	◎	◎
区 民	住民、公園利用者、緑地管理者	◎	○	○	◎	○
団 体	住区住民会議・町会・自治会、商店街、公園活動登録団体※、NPO等	◎	◎	○	◎	○
事 業 者	企業、商店等	◎	◎	○	◎	○
学 校	小・中学校、高等学校、大学、専門学校等	◎	◎	○	◎	◎
他自治体	近隣区、他の自治体	◎	◎	◎	◎	◎
都	東京都	◎	◎	◎	◎	◎
国	国	○	○	◎	◎	◎

○ 取り組み ◎ 重点的な取り組み



写真 駅前花壇での活動(祐天寺)



写真 ピオトープ※の活動(五本木小学校)

(1) 野鳥のすめる多様な環境をつくる基本行動と取り組み

・まもる・戻す・つくる・つなげる・育てる・

まもる いきものや、いきものがすんでいる環境をまもります。

8つの「めぐろの風景」(P.14,15)をまもる

絶滅のおそれのある野生生物種が生息・生育できる環境をまもる

保存樹木等の指定により、樹木や樹林の保全を図る

樹木の保全協議制度*により、敷地の樹木の保全を図る

公共施設や大学等の樹林を生物多様性保全林*として指定し、地域のいきものをまもる

公園等造成時などの表土の保全により、有機物の入った土壌を保全する

土壌に含まれる地域の系統の種子を保全し活用する

農地の保全を図る

湧水の保全を図る

サクラ基金*を活用し、桜のある風景を伝えまもる

雑木林*の手入れにより、スミレなどの在来植物の生育環境をまもる

公園や公共施設等の舗装は最小限として、いきもののすめる土や地面を確保する

いきものの現状や変化を把握する生物多様性調査を実施する

いきもの住民台帳*を定期的に更新し、地域の保全活動の基礎資料とする

戻す いきものがすめる環境に戻します。

公園・緑地等の計画、整備、管理、植栽を通して野鳥等のすめる環境の回復を図る

過度な清掃等による裸地化した林床*から、落ち葉が堆積し腐葉土になる林へ復元する

在来種*(地域の系統にも配慮)による植栽を推進する

公園の樹林等で工夫(エコスタック*等の設置)し、いきものを呼び戻す

落ち葉ンク*を推進して落ち葉を土に戻し、土壌動物のすむ環境に戻す

トンボ等のすめるビオトープ池の設置とビオトープ活動で、水辺の環境に戻す

目黒川と呑川の維持用水を確保(清流復活事業*)し、清流に戻す

目黒川の環境改善により、東京湾から遡上する魚などを呼び戻す

舗装は可能な限り透水性とし、地面に雨水を戻す



図 4-1 観察情報の集積と利用



写真 湧水の流れ(駒場)



写真 落ち葉を土に還元する活動「落ち葉ンク」

つくる いきものがすめる環境をつくります。

みどりの効用(景観、防災、うるおい、観光、環境浄化等)を活かしたみどりのまちづくりを推進する

さまざまな活動の場となる公園の整備を進める

いきものに配慮した緑地の整備・管理を行う

いきもの・ふれあい・めぐみといった目的に応じて拠点のみどりをつくる(P.62)

建築時の緑化計画制度*により、敷地や建物にみどりをつくる

接道部や屋上・壁面・バルコニーの緑化を助成し、民有地のみどりをつくる

公共施設に、地域のモデルとなるようなみどりをつくる

エコスクール*活動の推進等により学校に森をつくる

草屋根やバルコニー緑化などの工法や材料等の普及・啓発により建物全体にみどりをつくる

屋上や公園に菜園や田んぼをつくる

花や実、紅葉など、季節や旬を感じる植栽を推進する

吸蜜植物*を植栽し、花粉を運ぶいきもの(チョウやミツバチなど)を呼び場をつくる

実のなる木を植栽し、野鳥がすめる場をつくる

子どもたちが土にふれあう場や機会をつくる

バルコニーにプランターや水盤などを置き、野鳥や昆虫を呼び環境をつくる

外来生物や人間にとって有害ないきものの考え方(P.45)を理解し、みどりをつくる



図 4-2 バルコニーにいきものを呼び工夫



写真 草屋根の例



図 4-3 建築時の緑化計画制度による敷地の緑化の例
一定規模以上の敷地への建築行為等に対して緑地を確保させる施策。敷地の面積によっては、屋上緑化も対象となる

○植栽に対する配慮^{注1}

表 4-2 鳥を呼ぶ木一覧

● つきやすい ● ふつつき ▼ つきにくい

		高さ(m)	果熟期(月)	葉の色	陰陽	乾湿	さし木
常緑低木	マンリョウ	0.6~2	10~12	赤	陰	湿	●
	ヤブコウジ	0.2	12~2	赤	陰	中	●
	ヒサカキ	1.0	10~11	紫・黒	中	乾	●
	マサキ	2~6	10~12	橙・赤	陰	湿	●
	ホズミモチ	2~6	10~11	紫・黒	陽	湿	●
	イヌツゲ	2~6	10~11	黒	陰	過湿	●
常緑高木	モッコク	7~15	10~12	紅	陽	湿	▼
	クロガネモチ	6~18	11~12	紅	陽	過湿	●
	シラカシ	20	秋季	どんぐり	陰	中	▼
落葉低木	ガマズミ	1.5~4	10~11	紅	陽	過湿	●
	ウメ	2~5	10~11	紅	陽	過湿	▼
	ニシキギ	3~8	10~11	黄紅	陽	過湿	●
	ムラサキシキブ	3~5	10~11	紫	半陰	湿	●
	マユミ	6~9	10	紅	陽	過湿	●
	ズミ	3~6	8~10	紅	陽	湿	●
	ツルウメ	ツル性	11~12	黄・赤	陽	過湿	●
落葉高木	ムクノキ	20	10~12	黒	半陰	過湿	▼
	イイギリ	10~15	10~12	赤	陽	湿	▼
	カキノキ	20	10~11	黄・赤	陽	過湿	▼
	エノキ	10~20	10	赤・褐	半陰	湿	▼
	ウメ	3~6	(花の蜜)		陽	過湿	●
	クサギ	3~10	10~12	紫・紺	陽	過湿	●
	ミズキ	~20	8~10	紫・黒	陽	湿	●
	ヤマザクラ	6~12	6~7	黒・紫	陽	過湿	▼
	コナラ	20	秋季	どんぐり	陽	中	▼

注 1 樹種の選択にあたっては在来種に配慮する

○特定外来生物指定の植物の例

特定外来生物^{*}に指定されているものは、栽培、植栽、保管等が禁止されています。全種のリストは附属資料-4 参照。()内は別名。

オオフサモ、オオハンゴンソウ(ルドベキア・アキニアタ)、ボタンウキクサ(ウォーターレタス)等



写真左:オオハンゴンソウ 右:オオフサモ

表 4-3 虫を呼ぶ木や草一覧

食樹	ミカン類	アゲハ・クロアゲハ・ナガサキアゲハ
	クスノキ	アオスジアゲハ
	フジ	ウラギンシジミ
食草	エノキ	ゴマダラチョウ・アカボシゴマダラ
	ソラマメ	ウラナミシジミ
	シロツメクサ	ツバメシジミ
吸蜜植物	カタバミ	ヤマトシジミ
	スイバ	ベニシジミ
	ハナダイコン	ツマキチョウ
その他	フジウツギ	ツマグロヒヨウモンなど
	ハギ	キタキチョウ・ウラナミシジミなど
	クサギ	アゲハなど
その他	ネムノキ	アゲハなど
	イチジク(実)	ルリタテハ・カナブン類など
	カキノキ(実)	クヌギ(樹液)
	クヌギ(樹液)	クワガタ・カナブン類など



図 4-4 鳥やチョウの来る植物の例^ア

○人間にとって有害ないきものの考え方

自然界の中ではすべてのいきものが何らかの役割を果たしていることを認識したうえで、人間の影響で環境変化が進んだ結果地域本来の生態系を大きく変質させてしまういきものや、人間への危害が想定されるものに対しては、被害を発生させないように努めていく必要があります。すがたが気持ち悪いなどの不快生物に対しては、安易な薬品散布等の駆除を避けます。

表 4-4 いきものに配慮した緑地の整備・管理の例

区分	チェック内容
全体	地域の歴史、風土、8つの「めぐろの風景」を活かした設計、整備、管理とする
	動植物のモニタリング等による専門調査を継続し、自然の推移や変化に対して対応しながら管理する
	表土の保全と活用を図る。地面・草地の保全、水辺地の保全を図る
	地域の参加を促進しながら緑地マネジメント等を定める
	小規模な緑地でも樹名板や地域のいきものを紹介する標識等の設置など、環境学習や活動への参加誘導の効果も配慮する
樹林形成	保全を重視した樹林では、間伐による樹木の世代交代を含め、弱った樹木の間伐、外来種*の低減等、樹林全体の育成を図る。新規植栽は、在来種*を中心とする
	雑木林*では、地域住民等による萌芽更新*手法による管理を図る
	樹林更新のため後継樹を育成する階層構造*をつくり、林縁部は林内の過度な乾燥を防止し、小動物の生育の場ともなるマント・ソデ群落*を保全する
草地の管理	パッチ状*に草丈を変化させるなど、刈り方の工夫をした管理を行う。立地に応じて同じ種でも群落の高さを変えることも検討する
竹林の管理	目黒式竹林管理*の手法を参考に育成。切り出しの量・時期、林床*の下刈り、面積規模による伐採の量・時期に着目し管理する
落ち葉の管理	落ち葉や落下した枯れ枝を樹林内に堆積させ、林床を保全する。雑木林では、林床の野草育成のため初冬期の適度な落ち葉かき等を行う
	広場や園路等の樹林以外に落ちた枯れ葉は、園内に落ち葉だめ(落ち葉シク*)を設置し、住民等の活動による腐葉土づくり等に活用する
	スミレ等武蔵野の野草を目標指標種として、林内の生育環境を整備する



図 4-5 樹林の階層構造と林床の保全

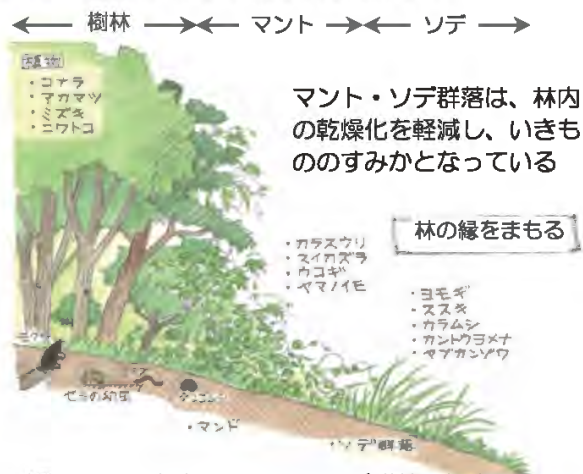


図 4-6 林縁部のマント・ソデ群落の保全



図 4-7 萌芽更新のイメージ



図 4-8 草地の管理は、刈り込む高さや刈る時期に差を設け、パッチ状に草高に変化を持たせる

区分	チェック内容
園路等	林内では、園路と人の踏み込まない場所を区分けする バリアフリーに配慮しながら、なるべく舗装を行わない園路とする
土留め・園路柵	見切り(立ち入り禁止区域・観察路の境)は、縁石ブロックの代わりに丸太や太めの剪定枝、そだ*垣等を利用する。縁石に変化をつけいきものの移動に配慮する
生物誘致の工夫	生物の生息環境となるエコスタック* (ウロ穴、立ち枯れ木、林内に落ち葉や枯れ枝を残す、石積み、剪定枝を置く等)を設置する トンボの止まり木、ヤゴの登る水辺の植物の植栽、護岸の傾斜等を確保する 有機農法*等を推進し、花粉を運ぶいきものを誘致する
種子の活用	どんぐりからの苗の育成や、表土を保全することで埋土種子*集団の活用を図る
有害生物等	農薬・殺虫剤等をなるべく使用しない対処方法を検討する(P.45)
サイン	看板、由来や歴史のガイド、いきものや生物多様性の解説、樹名板・種名版の設置など通行人もしくは利用者へ提示する説明型表示板に工夫をこらす(P.48)
池・流れ・水田等の水域	ビオトープ*池などの水際にエコトーン*をつくる環境・植生*等の管理を行う。じゃぶじゃぶ池はいきものへ配慮をする。ケルネル田んぼ*の水路を保全する 周辺の水田の畦(あぜ)、水路、土手などを多様ないきものが見られる場所とする



図4-9 縁石外側の工夫例(碑文谷公園「花の公園」)



図4-10 いきもの誘致の工夫例(竹を束にしてつるすとドロバチやハキリバチなどが集まり)

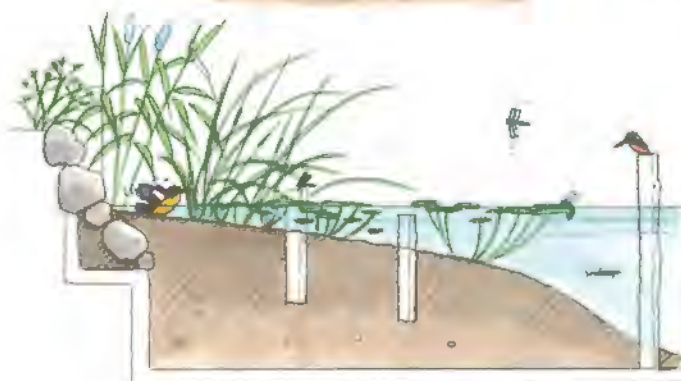


図4-11 浅瀬をつくり水辺のエコトーンを確保

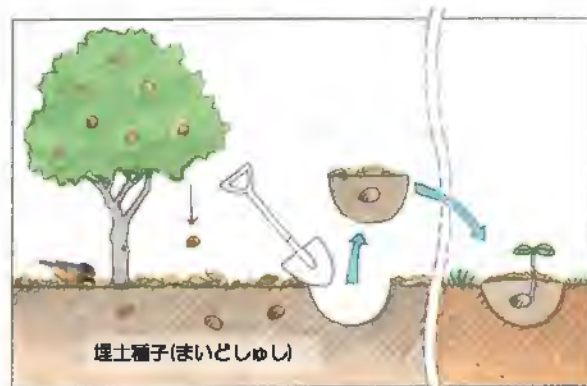


図4-12 表土の保全と埋土種子の活用



写真 立ち入らないエリアの見切り例

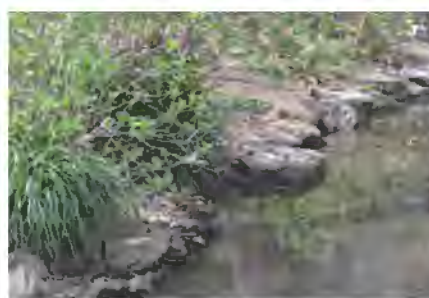


写真 石積に変化をつけ野鳥が水浴びしやすいように工夫



写真 エコスタックの例 剪定枝を積み上げ、トカゲなどの動物のすみかをつくる(駒場野公園)

つなげる いきものがすむ環境をつなげます。

関連計画や事業に生物多様性確保の視点を反映する

街路樹や道路植栽帯を整備し、みどりをつなげる

緑道を整備し、公園等とつなげる

目黒川両岸などのサクラ並木を更新し、公園等とつなげる

育てる いきものがすむ環境を育成します。また、区民のいきものへの理解を育てます。

生物多様性保全林*での住民活動を支援し、いきものがすむ環境を育てる

雑木林*の更新作業を支援し、里山*の環境を育てる

区民のドング林(りん)活動*を支援し、いきもののすむ林を育てる

説明型表示板(メディアボード)^{注1}を利用していきもののつながりを説明する

区民参加型のいきもの調査(駒場野自然クラブ*、いきもの発見隊*、巣箱モニター*など)を継続し、いきものへの理解を育てる



草地の意味を伝える例(「ここは鳴く虫たちのコンサート会場です」と表示)



子どもたちの目線の高さに設置



落ち葉の役割を解説した看板例(いきものしるべ:碑文谷公園)



手描き看板の例(左: ぼくはタケノコ(すずめのお宿緑地公園) 中: 差し込み式看板等(中目黒公園ほか) 右: 碑小学校)



写真 説明型表示板(メディアボード)



注 1 説明型表示板(メディアボード)

公園活動の紹介や季節の花・いきものたちの観察ポイントなどを利用者に伝える「メディアボード」と呼ばれる看板(中目黒公園の開園時の活動から生まれた呼び名)。

(2) 自然と共生する豊かな心を育む基本行動と取り組み

・親しむ・気づく・変える・楽しむ・学ぶ・続ける・

親しむ いきものにふれあい親しむための、場や仕組みを提供します。
公園活動やグリーンクラブ*活動等のボランティア活動を通して、みどりに親しむ
野鳥のさえずり*や鳴く虫の声を聞いたり、花の香りを感じ、自然に親しむ
公園の花だよりをホームページで継続して発信する
公園や地域のシンボルツリーの選定やガイドマップの作成により木に親しむ
80選のいきものたちの冊子や動植物の図鑑で、身近ないきものに親しむ
たけのこタウン*等の情報誌や印刷物で身近な自然やまちの歴史に親しむ
むかしの自然遊びの伝承など、児童館等での自然に親しむ行事に参加する
自然通信員*に登録し、観察や記録を通していきものに親しむ
いきもの气象台観察ノート*を活用して季節の自然に親しむ
碑文谷公園こども動物広場*でポニーや小動物とふれあう
苗木配布や公園の植栽などで区の花ハギを普及し、武蔵野の風情に親しむ
屋上施設(目黒天空庭園*や目黒十五庭*)から見る新しいみどりの風景に親しむ



図4-13 自然に親しむヒント^R



写真 新しいみどりの風景。
屋上緑化(目黒十五庭)で収
穫されたサツマイモ



写真 七草粥(ななくさがゆ)を食べ
る(駒場野自然クラブ)



写真 碑文谷公園のこども動物広場。日ごろ、動物と接す
る機会の少ない都会の子どもたちがポニーや小動物とふ
れあうことのできる場所となっている



気づく いきものの大切さ、いきものへの配慮の必要性に気づくための場や仕組みを提供します。

一人ひとりの取り組みのチェックリストの実践(P.70)で自然とのつながりに気づく
駒場野自然クラブ*等で子どもたちの原体験*からいきものの大切さに気づく
いきもの発見隊*等で身近にいきものの暮らしがあることに気づく
講座・イベント・展示・印刷物・広報等を通して身近な自然の大切さに気づく

変える いきものに配慮した行動に変えるための仕組みをつくりまします。

学校等で草地を雑草園とし、自然の仕組みを学ぶ場に変えていく
「もったいない」の視点で、水や食物を無駄に消費する生活を変える
自然観察舎で里山*の暮らし方を学び、生物多様性に配慮した生活を心がける
ごみ出しの仕方に注意するなど、生ごみを食べる習性のあるカラスが増えすぎないように心がける

楽しむ いきものを楽しむための場を提供します。

公園や目黒川などに出かけて、お花見や紅葉を楽しむ
みどりの散歩道*を歩き、まちの自然や身近な歴史を楽しむ
落ち葉を踏む音や、落ち葉の上に寝転ぶ感触などを楽しむ
夜の鳴く虫を聞く会、星の観察会、俳句づくりなどを通じて自然を楽しむ
カメラやレコーダーでいきもののアルバムづくりを楽しむ
区が自然やいきものの実態を把握できるよう、いきもの情報を提供する
旬の食材やさんま祭*、さくら祭等の季節のイベントを楽しむ
区民農園を利用し、収穫を楽しむ
いろいろな場所で野菜づくりを楽しむ
イモ掘り、ブドウ狩り、農産物品評会等の実りのイベントを楽しむ
坂道ウォーキング*を楽しむ
家庭や学校で季節を楽しむイベントを実施する
屋上緑化・壁面緑化など新たな手法によりみどりを楽しむ
友好都市(宮城県角田市、気仙沼市)との交流で地元の産物を楽しむ



写真左 目黒のさんま祭*



写真右 公園や文化財を巡るみどりの散歩道
(国指定重要文化財の旧前田家本邸*・駒場公園)



写真 花とみどりの学習館*の活動(P.51)

学 ぶ いきもののことを学ぶための場や仕組みを提供します。

さまざまな機会を通じて生物多様性について学ぶ

花とみどりの学習館でエコ園芸^{注1}や土の役割などを学ぶ

いきもの气象台*等の情報を見て自然の変化を学ぶ

古民家での季節の行事の再現を体験する

伝統文化子ども教室を継続する

エコスクール*の推進で自然の大切さを学ぶ

学校でのビオトープ*活動で身近ないきもののつながりを学ぶ

学校の花壇や菜園での植物育成を通じて命の大切さを学ぶ

観察ルームの設置により、環境学習を推進する

自然観察会やまち歩きなどを通じて身近な生物多様性を学ぶ

社会教育講座などで生物多様性を取り上げる

家庭や学校の本棚に生物多様性に関する本*を置く

生物多様性に関するビデオを作成して環境学習などで活用する

食育*等により自然の恵みや地産地消の大切さ、花粉を運ぶいきものの働きなどのいきもののつながりを学ぶ

捨てられたペット等が野生生物を捕食するなど自然に影響を与えていることを学ぶ

外来生物の取り扱い*「入れない、捨てない、拡(ひろ)げない」について、普及・啓発する



写真 こどもの日の飾り(すすめのお宿緑地公園の古民家)



写真 ビオトープの活動(五本木小学校)



写真 地産地消・食育のパネル展示



図 4-14 観察ルームの例

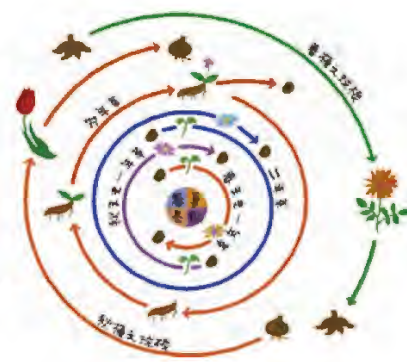


図 4-15 エコ園芸のイメージ

注 1 自然環境を考えた循環型園芸のことで、無農薬、有機栽培で種から苗を育てることから始めるもの。中目黒公園の活動登録団体さーくる・ガーデン・クラブ(C・G・C)*が実践している

続ける いきものに配慮した行動を続けるための仕組みを支援します。

「ささえあう生命の輪 野鳥のすめるまちづくり計画」を普及する
エコラベル*等を普及する

個人・家庭・学校・商店街・NPO・事業者・地域の取り組み等が続くよう支援する

昆虫等の標本を集積し、活用する

区報やホームページ等を通じて生物多様性の大切さへの理解を深める

中学・高校生タウン情報誌「めぐろう」等により、公園や公園での活動を紹介する

いきものに関する観察記録を集積したホームページをつくり更新を継続する

生物多様性に配慮した生産者や事業者を支えるための消費活動が続ける

いきものの環境の変化をとらえるために、身近な自然の観察を継続する

五感で感じる今月の見どころ

冬野菜の王様、**大根**を育てています！



漬けものイベントがあるよ！

煮ても、漬けても、生でも美味しい大根。中目黒公園でも漬けものに挑戦しようよ、いろんな品種を育てています。



写真 中学・高校生タウン情報誌「めぐろう」の記事例

図 4-16 花とみどりの学習館*の事業例(季節感の醸成)



上左: エコマーク 環境配慮商品の普及((公財)日本環境協会)

上右: 生物多様性に配慮した農園の認証等(レインフォレスト・アライアンス認証)

下左: 間伐材の利用(全国森林組合連合会)

下右: 持続可能な漁業・水産物の普及(海洋管理協議会(MSC))



写真 生物多様性のイベントで標本を見る

区民による身近な生物調査*では、区民の自主調査の参考とするために、専門家により昆虫等の標本を作成しています。標本はその生物の存在を証明するもので、種を見分ける拠りどころとなるほか、その種の分布状況や時代による変化などを知ることができる貴重な資料となります。

図 4-17 エコラベルの例^R

(3) ささえあう^{いのち}生命の輪を広げる基本行動と取り組み

・知る・気づかう・加わる・広げる・輪になる・

知る 私たちのまちの身近ないきものや、まちの成り立ちなどを知る機会を提供します。

エコイベントに参加する

みどりの散歩道*を歩いたり文化財めぐりに参加し、歴史・文化・風土などを知る

江戸の名所*を巡り大樹を見るなどエコ都市だった当時を知る

自然観察のまち歩きやいきもの発見隊*に参加し、身近ないきものを知る

区報等を通じて生物多様性の大切さを知る

環境のイベント等に参加し、他の団体の活動内容を知る

シジュウカラの巣箱モニター*を通して身近な自然を知る

気づかう さまざまな活動でいきものへの配慮を図ります。

食料やさまざまな資材の生産地の環境を気づかう

家庭、事業者、学校等で一人ひとりが生物多様性に配慮した活動を実践する

「一人ひとりの取り組み(P.70)」や「21 の提言*」、生物多様性のロゴマークを活用する

企業等に対して生物多様性への配慮活動について啓発する

加わる 区民団体の活動を支援します。

公園活動登録団体*などの活動に参加する

活動団体やNPO等の活動情報の共有を図る

「いきもののすめる庭」(P.68)の認定に参加する

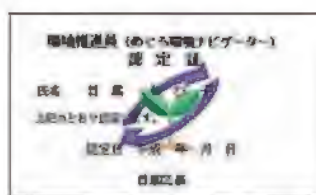


図 4-18 めぐる環境ナビゲーター* (環境推進員)の認定書



図 4-19 国や国連が推進する生物多様性事業のロゴマーク¹⁾



写真 いきもの発見隊による目黒川調査



写真 ミツバチを用いた緑化活動(自由が丘)

広げる いきものに配慮した活動を広げるための場や仕組みを提供します。

みどりの基本計画を推進する

活動を通して、地域・学校・公園等をいきものが育つ「入会(いりあい)※の場」にしていく
区民の手によるどんぐりからの森づくりなど、木々を育て森を広げる

お花見や紅葉狩りなどのイベントを支援する

森のみどり人(すと)※・環境ナビゲーター※養成講座等を開催し、生物多様性保全のリーダーの育成と活用を図る

企業のCSR※を活用した活動を推進する

新聞、雑誌、広報誌、ホームページなどで生物多様性を特集し、仲間づくりを広げる

農業体験の場や機会を広げる

集めると花の種などがもらえる生物多様性のスタンプをつくる

ICT※を活用した情報提供により生物多様性の活動を広げていく

グリーンデータブックなど、いきもの气象台※の事業により自然情報を公表発信する

目黒区の取り組みを積極的に発信する

輪になる 単体で実施されている活動をつなげる仕組みをつくります。

公共施設や保存樹林所有者に緑地の保全・育成を要請する

大学や研究機関の情報を活用して、地域活動の連携を図る

生物多様性に関する活動に加わる

いきもの住民会議(活動団体、自然通信員※等の研修・活動報告)を開催する

フォーラムなどで、情報共有の機会を提供する

「いきもの学校」等区民や事業者、NPO、行政等が連携するイベントを開催する

環境ナビゲーターの活動の場を提供する

パークコーディネーターを活用しパークコミュニケーション※を醸成する

観察指導員やインタープリター※を増やす

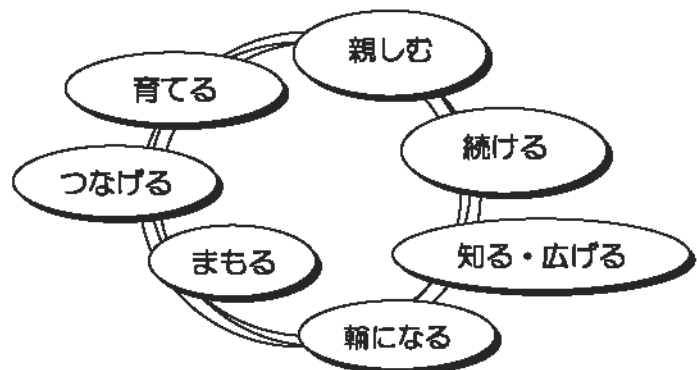
地域住民、公園利用者と公園活動登録団体※とが連携を深める

生物多様性の確保に取り組む自治体や友好都市と連携する

周辺自治体との連携を検討し、隣接区とのエコロジカルネットワーク※の創出を推進する



写真 インタープリターが活動する
自然観察舎(駒場野公園)



ささえあういのちの輪

図 4-20 施策の連携のイメージ。輪は区民・事業者等・行政等を表します(主な基本行動を抽出)

4-2 地域別の取り組み

(1) エコロジカルネットワークをつくる

都市の中にいきものたちのすめる場所を創出していくためには、地域の核となる緑地の保全を図るとともに、散在する緑地を緑道や街路樹などでつなぎ、いきものがすみ、移動できる緑地を効果的に配置することが重要です。このような緑地のネットワークを「エコロジカルネットワーク」といいます。市街地のエコロジカルネットワークの形成は、緑地が持つ環境保全、レクリエーション、防災、景観形成等のさまざまな機能が効果的に発揮され、人と自然が共生し、環境への負荷を低減し、みどり豊かな都市を実現することにつながります。地域別の取り組みでは、さまざまな関係者による活動の連携と協働によりエコロジカルネットワークの形成を図ることを目指し、めぐろの風景の醸成を図ります。エコロジカルネットワークの構成要素*として、「めぐろの森」、「まちの樹林」、「いきものの道」、「いきものの庭」の4つの区分を設定します。

これらの緑地のネットワークによって、野鳥の移動ルート、チョウの道*、地表面の連結などを形成し、最終的には、市街地内のみどりやいきものの生息・生育環境が回復し、区民一人ひとりの足元までいきものが訪れ、いきものとのふれあいが実現することを目指します。



図 4-21 エコロジカルネットワークと構成要素

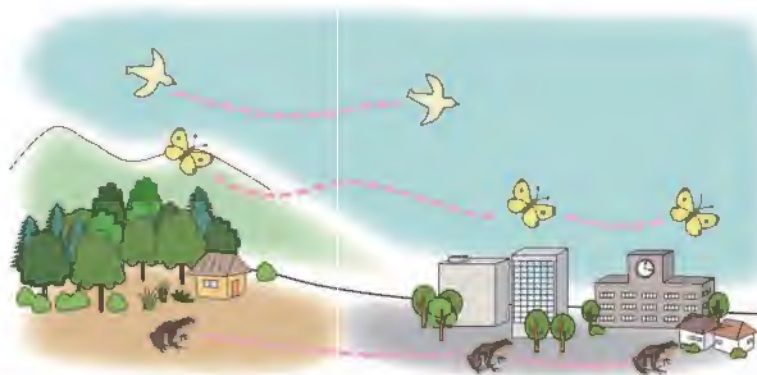


図 4-22 いきものの移動

野鳥は樹木や樹林、チョウや昆虫は生け垣や花、トカゲやヒキガエルなどの小動物は地面を伝って移動します

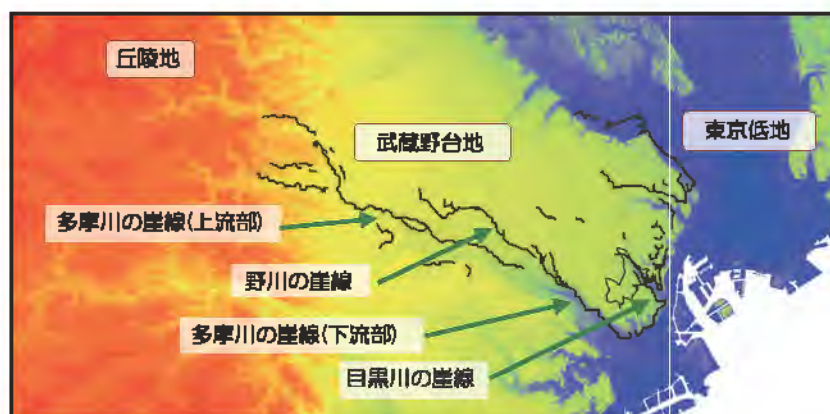


図 4-23(上)・24(下)
広域的なエコロジカルネットワーク*

目黒区は武蔵野台地の東端にあって、多摩川や野川などの崖線*に残されている緑地を通じ、遠く自然豊かな奥多摩や関東平野周辺の山地と繋がっています。また、区の周辺には、国立科学博物館附属自然教育園(港区)、都立代々木公園・明治神宮(渋谷区)、洗足池公園(大田区)、世田谷公園(世田谷区)等があり、いきものたちは区境を越えて移動します。

目黒川、呑川は東京湾に流れており、目黒川では、中目黒の船入場まで潮の満ち干きの影響を受ける感潮域となっています

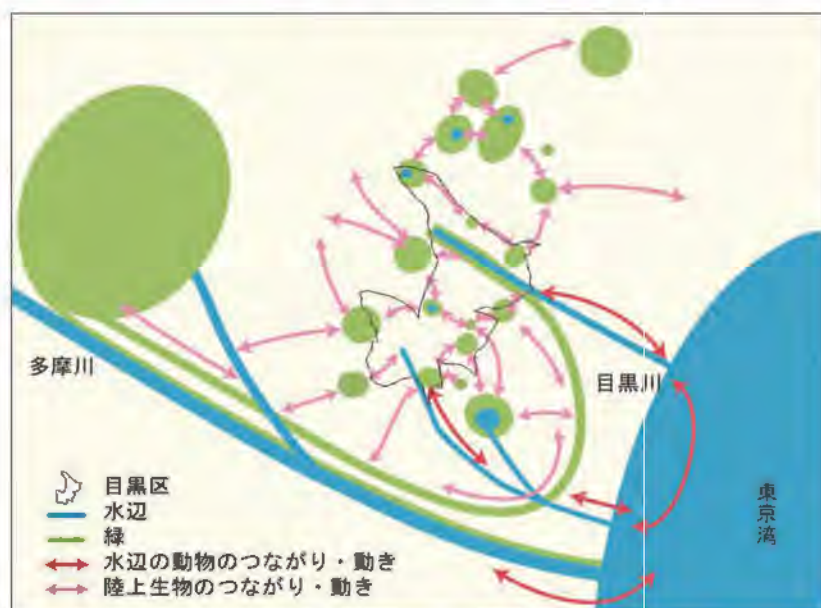


表 4-5 近隣区の鳥類の観察例^R

種名	都立林試の森公園 (目黒区・品川区)	洗足池公園 (大田区)	世田谷公園 (世田谷区)	等々力溪谷公園 (世田谷区)	都立駒沢オリンピック公園 (目黒区・世田谷区)	国立科学博物館自然教育園(港区)	呑川 (大田区間)	目黒川 (品川区間)
コゲラ	●		●	●	●	●		
ツバメ		●	●	●	●	●	●	
ウグイス	●		●	●	●	●		
シジュウカラ	●	●	●	●	●	●		●
スズメ	●		●	●	●	●		●
オナガ		●	●	●	●	●		